

堀辰雄の『萬葉集』受容に関する総合的研究

——旧蔵書調査を中心として——

渡部麻実

一 はじめに

西洋文学の強い影響下に近代文学の行方を模索してきた堀辰雄が、『風立ちぬ』の擱筆¹⁾と前後して、『萬葉集』に傾倒していったことは比較的よく知られている。だが、『萬葉集』に取材した小説は、書簡や遺稿によって窺うことができるものの完成をみていない。ゆえに『萬葉集』受容の様態は、おもに随筆²⁾によって把握され、その主たる関心は挽歌に向いていたとの認識が持たれてきた。それに対し近年、防人歌に注目する視座から、堀と『萬葉集』の関わりを捉え直す動きが登場している³⁾。

さて稿者は、二〇一一年以来、堀辰雄の旧蔵書（堀辰雄文学記念館蔵）に含まれる『萬葉集』関連文献の網羅的な調査を試みてきた（表1・2参照）。蔵書への書入れを中心とする肉

筆資料群から浮かび上がる堀の関心は、必ずしも挽歌に集中していない。座右の書『鑑賞短歌大系』第五卷（旧蔵書の書誌情報については「表1」を参照）には、巻十五・三七二・三番歌について「山路を行くといふことは挽歌によく見える（本稿の引用における傍線、囲みはすべて堀辰雄による）。この歌にしても挽歌だというて妥当でないこともない。結局おなじ発想だからだ」、同六巻には巻十四・三四七五番歌に関連して「悲別歌と挽歌とは、実は区別はないのである。萬葉集の编者たちも、その点誤解してゐることが多いであらう」と記されている⁴⁾。これらをふまえつつ関心の向所を一言で評するなら、むしろ離別歌と述べるのが適切であろう。死が遠方に赴くことと地続きともいえる古代の死生観に下支えされた、死別と離別との特殊な接合に、堀の獲得した『萬葉集』観の一端があったと見てよい。かかる認識に立てば、

挽歌、防人歌、遣新羅使人歌群はいずれも離別歌と言ひ換えられる。堀の『萬葉集』受容について、その内容を問題にする場合には、以上を第一の特徴として指摘することになるだろう。だが旧蔵書は、読書場の堀が、内容と同程度に、その方法にも囁目していたことを如実に語り出している。拙稿「堀辰雄〔出帆〕と『萬葉集』」では、そうした観点との関わりにおいてテクスト分析の実践を試行した。本稿では素材の提供に重きを置き、旧蔵書を中心とする調査の結果を、紙幅の許すかぎり共有し、あわせてその特徴を整理してみたい。

二 『萬葉集』受容の特徴

第一の特徴は、前述のとおり堀の関心歌の多くを離別歌が占めていることだ。離別歌は、最晩年の小説草稿「出帆」とも直截響き合う。第二の特徴としては、歌中に詠み込まれた古代の習俗や生活それ自体への関心が挙げられる。萬葉人の家は鉄骨では建たない。旧蔵書には、古代を舞台とする創作のための雑多な取材活動の痕跡が刻まれている。季節ごとの動植物は、そもそも歌に詠まれる頻度が高いこともあつて堀の参照度も高くなりがちだが、なかでもホトトギスはよく出現する。「古爾。戀良武鳥者。霍公鳥。〔卷二・一二二〕」を想起すれば、ホトトギスは失われたものへの思慕に通ずる鳥と言うこともできよう。その他、書込み対象歌には、峠や坂の神への祈り・捧物、各種占ひ、紐・帯が多く登場する。いずれも羈旅の無事や離別の解

除の祈願、恋人への思慕との関わりが深い事物である。習俗への関心は、第一の特徴とも無関係ではない。

第三に挙げたいのは、表現技巧の変化・深化についての関心である。例えば「うらく／＼に照れる春日に、雲雀揚り、心かなしも、独りし思へば。〔卷十九・四二九二〕」は、蔵書で三回ノオトで二回、参照の痕跡が認められる。本歌は、『鑑賞短歌大系』第六巻で「近代的なよい諸条件を具備してゐる」とされ、『作者類別年代順萬葉集』下巻の当該歌掲載頁の余白には、「独居沈思ノ態度ハ既ニ支那ノ詩ノオモカゲデモアリ、仏教的靜觀ノ趣デモアル。コレモ家持ノ到リ著イターツノ歌境デアツタ。〔茂吉〕と書込まれ、その左注「春日遲遲として、鶴鷓正に啼く。悽惻の意、歌に非ずば、撥ひ難し……」にも記号「カギ括弧」が書き加えられている。春光のなかを舞い上がるヒバリが形作る陰影、その陰の落ちる地上、人間の生の孤独な在り様が胸に迫り、情景が内的風景と響き合い、内省が一段と深まっているのを感じさせる。そこに、外来の文字と思想の影響を指摘した斎藤茂吉の解説への関心は看過しにくい。

もう一例、蔵書で一回ノオトで二回の参照の跡が見られる「ぬば玉の夜の更けゆけば、楸生ふる清き河原に千鳥頻鳴く〔卷六・九二五〕も挙げておきたい。本歌を引いたノオト「古代研究(二)」に「前ノ歌〔九二四：引用者注〕モ、コノ歌モ、聴覚カラ自然ノ核心ニ迫ラウトシテキル。聴覚ニヨル新シイ写生ノ方法ヲ発見シテキル」とある。他方「水のうへ」では、やや異なる解釈

を行い「鳴き絶えぬ千鳥の声を夜牀に聴きながら、昼見た「楸生ふる清き川原」を冥想してゐるのである。独座深夜の幽情」と説明する。興味深いのは、深夜の川原という不可視の光景を、風景として捉える点だ。このような解釈には、堀が師事した折口信夫の影響が認められよう。「座談会 国文学と現代文学」で折口は、「今その景色を見て居るのではなからうと思ひますね。夜旅に居つて坐つて居つて、冥想に耽つて居ると、昼間見たひさぎの生へてゐる河原が目に浮んで来たのでせうと思ひます。(略) 夜、鎮魂の歌を詠つて居るから、その調子で自分の創作の歌もそんな風なものになつて来る。(略) 結局景色の歌を作らうと思はないで作つて居るところに風景詩が出来て来る」と語っている。

前の四二九二番歌では、中国詩の影響による日本の歌の変化に着目していたのに対し、九二五番歌では日本の歌の内発的な展開が論じられている。いずれも、叙景歌、風景詩の展開への関心が着眼の動機を成しているが、こうした傾向は、上記の二例に限らず手沢本に広く認められる特徴である。

四つ目として、参照歌中の多くを家持歌が占めていることを指摘しておきたい。「萬葉集」最多収録数を誇る歌人であることに鑑みれば、必ずしも堀の個性とは言えないが、家持への関心は、堀の随筆「死者の書」(「婦人公論」一九四四・八)が「唯一の古代小説」と嗟歎する折口「死者の書」への関心に連なるとともに、堀の古代小説の構想との関連も認められるため看過

できない。同様に、二番目の収録歌数を誇る人麻呂への関心も堀の個性とは言い難いかもしれないが、見逃しにくい。一首につき複数回参照された例として、巻四・五〇三番歌を挙げておく。旧蔵書『歴代歌人研究 柿本人麻呂』の解説に、「さあ／＼」は、その衣ずれの音であらう。それが今鎮つてといふのは、我が妻の物音もせず静まり反つたことを言ふので、多分別れに臨んで、泣き伏したりして衣ずれの音をも立てなくなつたのである、と思はれる。(略) 旅に出る時の歌と認められる(二二六頁)とある。夫婦の別れ際の悲痛を切り取つた本歌は、その切り出した空間に時間の経過を感じさせる。同じく同歌への書込みが見られる『鑑賞短歌大系』第五巻は、「さあ／＼しづみ 鎮魂の咒文から出て歌の用語となり、ざわめく音と感じたらう」と説明している。本例のように手沢本には、表現技巧についての関心とともに、歌の力、文学の仕事としての鎮魂・咒力といった要素への関心も顕著に認められる。

家持や人麻呂に対し、収録総数に比べ参照頻度のきわめて高い歌人として挙げる必要があるのが、高市黒人である。蔵書やノオトでの登場回数が多い赤人の場合でも、収録数五〇首に対し、堀の参照歌はその半数以下に止まっているのだが、黒人は、全一九首中、巻三・二八〇、三〇五、巻九・一七一八番歌を除く一六首について、書込みや引用が行われている。黒人歌のほとんどに何かしらの関心を向けていたことになる。蔵書で二度ノオトで一度の参照の跡が見られる三三番歌を例に挙げたい。ノ

オト「古代研究(二)」に「主観ヲ没シタヤウナ表現デ、シカモ底ニ湛ヘタ抒情力ガ見ラレル。此ガ今ノ「写生」ノ本體デア
ル」と記されており、表現技巧への関心も見てとれる。加えて
本歌は、近江旧都の荒廢を国つ神・地祇に求めるものであり、
古代の信仰への関心においても注視すべきものがある。

以上、旧蔵書を概観した際に観取できる特徴を四つ指摘した。
ところで稿者が、旧蔵書や遺稿類を未発表のものも含め網羅的
に渉獵したといつても、その対象は現存資料に限られる。たと
えば、佐佐木信綱『萬葉集選釋』(明治書院、一九一六・一二初
版、一九二六・三増訂版。堀の書入れ表記によれば初版に拠つ
たか)については、その記述と一致する書入れが、他の旧蔵書
やオトに度々認められるにも拘わらず、旧蔵書中には含まれ
ていない。これ以外にも、売却・焼失・貸借等々により失われ
た蔵書、散逸した手稿類があつた可能性は否定できない¹⁾。

三 『萬葉集古義』への書入れ(一)

本節以下、旧蔵書中に全巻が揃う『萬葉集古義』(以下『古義』
と略す)に焦点をあて、堀辰雄の読書場を再構成してみたい。

巻一・二四番歌について、『古義』第一巻の余白に施された
書込み「久布一クハヘ持ツコトニ云。／波牟一ノドニ下スニツ
キテ云。」や、「玉藻茹食」についての解説に付された傍線「後
世久布といふことを、古くはもはら波牟と云り(略)波牟とは
咽に下すにつきていひ、久布とはもはらくはへ持つことにいへり

と見ゆ」(二四八頁、同じく巻一・三六番歌に付された傍線「食
ふ物は他物を身に居住らする物なれば、やがて食字をラス(傍
点原文。以下、特段の断りがない場合はこれに同じ)と訓るにて、食字
の本義にはあらず、居ることを単には宇と云、敬ひては乎須と
云こと、聞ことを単には伎久と云、敬ひては伎許須と云と同じ
ことなり」(二九七頁)、二五番歌の解説「思乍叙来(思字、類
聚抄に念と作り)は、オモヒツ、ヅクルと訓べし、乍の言は
上に注り、(略解「傍点壘」に、モヒツ、ヅクルとよみたれども、
云々思などいふときこそオモヒをモヒといふ古語の例なれども、
句の頭にて略ける例は、をさく見えたることなればひがこ
となるべし) (略) 其所までおはします道すがらを、来とは詔
へることしるし、されば今世人の心ならば、思乍叙行といふべ
きを、かく詔へるなるべし」(二五二頁)への傍線や記号の付加
等々、「く／ふはむ」「来／行」のような日常の動作についての
用語・用字やその変遷に関する傾注は、顕著に観取できる傾向
である。巻二・一二三番歌の歌意の説明中の「長きに過て、今
はほとく、結べきさかひにいたれる、娘子の髪を、このごろ
病臥て、行て見ぬ間に、誰その男が、か、げ結つらむか、とお
ほめきて、とひやれるなり」(四四二頁)、「古の婚姻のさまは、
四巻に、君家爾吾住坂乃家道乎毛云々、とある歌につきて、委
注べし、(略) 古も夫と定めし男の、女の髪を上る風俗の、有
しなるべし」(四四三頁)なども、同様の例として把握できる。

その他、容易に認め得るものに、日並皇子尊(草壁皇子)へ

の関心がある。卷二・一一〇番歌の題詞に關連する解説中、石川女郎についての言及「そもく上古には、氏姓名の三ありて、(略)名と云ものは、もと其人の容貌功勞、其他なにくれの由縁ありて、其を贊美て負せたるものなり、されば名を呼は、其人を尊むかたなり、古天皇皇后皇子などには、御名代と云ことありしにても、後に名を稱を不敬とすとは、表裏のたがひにて、その尊稱なりしをしるべし」(四〇七頁)の余白に「上代ノ氏姓名一人ノ容貌功勞、由縁」と書込まれ、同じく「漢国には、姓氏名字号の五ありて」(四〇七頁)の余白には「漢国ノ姓氏名字號」と書込まれている。さらに「故天皇をば、其宮御宇天皇と記して、かりにも、御諱をば書さず(略)しかれども、そはかの漢国風をうつしとられし世となりて、名を呼を不敬とすることになる以降の事にて、其風の行はれざりし、上代の人名をば、漢国風のうつれる後の人のいふにも、忌避る事なくして、たとひやむことなきかぎりなりしをも、上代のまゝに申せしなるべし、されば足姫神尊なども、奈良人のよみたることありしと見えたり」(四〇九頁)というように、きわめて熱心な読書の痕跡が確認できる。皇族に対する上古の呼び方への関心が、そうした人物を配置した小説の創作に向けた準備と關連するものであることは想像に難くない。

上記の例以外にも、「皇子尊宮舍人等働傷作歌二三首」(卷二・一七一―一九三)は、『古義』に限らず旧藏書や遺稿ノオトにおいて、繰り返し参照・引用されている。軽皇子(文武天皇)に

關連する記述への書入れも非常に多い。皇太子のまま早世した日並皇子尊への傾注が、その子、軽皇子への注視を促したのだろうか。父、日並皇子尊の足跡を追い、皇都を出立し山を越え野に旅宿する軽皇子については、四五番歌に対する「深山なれば、人もつねに通はずして、路いとわろく、皇子などおはしますべき、路にはあらぬものを、といふこゝろをこめたるなり」(二三一頁)「旅やどりし給ふはひとへに父尊のむかしを、したひ給ふあまりなるべしと、その御孝心を、深く感じ奉りたるなり」(二三四―二三五頁)といった傍線の書入れも認められる。日並皇子尊や軽皇子以外にも、高位の青年、とくに皇子たちに対する熱心な受容の痕跡は、卷二・一四一・一四二番歌の有間皇子等々、随所に観取できる。

堀は、『萬葉集』に取材した畢生の長篇として、落魄し、大和を追われて流浪する貴人の物語を計画していたと推察されるが、旧藏書の書込みは、そうした小説の執筆が、具体的に準備されていたことを雄弁に語っていると見えるだろう。『風立ちぬ』以降の営為が、早世者の死生を文学によつて昇華しようとする試みを、ほとんど一貫して内包していたことに鑑みれば、その物語もまた、諦めに充ちた生に、時間や空間を超え得る意味を付与する種類のものではあったと想像することができるかもしれない。

太平洋戦争下、中村真一郎、加藤周一、福永武彦らと堀とが過ごしていた時間とその内実を顧みるなら、そこで模索されて

いたのは、一九四〇年前後の大戦中の日本という、一つの時代や場所との因縁を拒むことで、どの時代にもどの空間にも自らを開き続けようとする、誰のものでもあり得る文学であつたと考えられる。そこには、戦争協力も反戦もない。だが仮に、文学の方で戦争を打ち遣つておくことができたとしても、戦争の方では、文学を打ち捨て、置き忘れてはくれまい。零落し、たとえは失意のうちに早世してしまうような皇子の物語を活字化するとは畢竟（へんぎつ）へ文学を、自らの手で閉じた時代性の中に配置してしまうことに他ならなかつたのではないか。

四 『萬葉集古義』への書入れ（二）

以上に眺めてきた書込みが、一見して新しい小説の創作に資するものであるのに対し、小説の準備とは無関係に見える書込みも少なくない。本稿がもつとも強調したいのは、実はこの点なのだが、なかでも特徴的なのが『萬葉集』歌の訓じ方についてのきわめて繁多な書込みだ。

卷一・六三番歌の解説「早日本辺は、（略）旧本にハヤビノモト。ト。ト。と訓るは、論の限にあらざ、又岡部氏考に、ハヤクヤマトへと訓、又略解に、ハヤモヤマトへとよみたるも、ともにわろし、古事記下卷仁徳天皇条に、夜麻登幣邇（略）とあるによりて、ハヤヤマトヘニと訓べし」（二九二頁）や六六番歌の「枕宿杼」に関する解説「枕をマキテと訓は、マクラと云も則纏よしの称なれば、はたらかしてマキともマクとも訓なり、十卷に

も、君之手毛未枕者とあり」（二七三頁）、卷二・一〇〇番歌に對する「東人之は、アヅマヒトノと六言に訓べし」（三八五頁）、「妹情爾は、イモガゴ、ロニと訓べし」（三八七頁）、一二八番歌についての「葦若未乃（略）あしかびと訓べし、葦の若芽は、かたからず、なよくとしたる物なるゆゑに、足痛に、冠らせつらむ、又未は、末の誤にても（略）足痛は（略）古言のま、に、今は安奈夜牟、と訓むぞ宜しき、抑奈夜牟と云言は奈與夜可、奈與奈與、奈由流、奈夜須、など云と同くて、もと軟弱なるよしの言なれば、葦若未乃、といふよりの屬に、よくなへり」（四五〇頁～四五二頁、卷三・二五〇番歌の「敏馬乎過は、ミスメヲスギと六言に訓べし、（而字なければ、スギテとは訓べからず」（一九二頁）、あるいは二八八番歌の「吾命之は、ワガイノチノと訓べし、（ワガイノチシと訓るは、太じきひがごとなり、）（略）略解などに、例にもよらずして、此等を、ワガイノチと五音によみたるは、きはめて誤なりけり）」（二二九頁）等々に見られるように、訓じ方に着目した例は枚挙に遑がない。素朴に解するなら、そこからは教場の学習者の側面を見出すことになるだろう。実際に折口の講義に参加していた堀は、まさしく教場の学習者でもあつたわけだ。だが、ここで稿者が提示したいのは、そうした読書のあり様ではない。

『萬葉集』関連の旧蔵書は、訓じ方やその変遷についての傾注を顕著に物語っている点で、それ以外の旧蔵書、たとえば、その量によつても蔵書中、重要な位置を占めるブルーストヤ

リルケに関する文献とは、明らかに異なっている。後者の場合も、単語の意味調べをはじめとする学習的な書込みは多く見られるのだが、そこから、内容の理解に必須の基礎作業以上の意味を見出すのは難しい。それに対して『萬葉集』の場合は、歌意や歌の背景の理解のための基礎的学習という以上に、古代語やその音への傾注が観取できるのだ。なお、これに関連して、蔵書の書入れ箇所にもノオトにも繰り返し登場する巻六・九二四、九二五番歌について、「古代研究（二）」に「前ノ歌モ、コノ歌モ、聴覚カラ自然ノ核心ニ迫ラウトシテキル。聴覚ニヨル新シイ写生ノ方法ヲ発見シテキル」と記されていることにも注目したい。

大正期、昭和初期の堀は、西洋文学を邦訳しつつ、その日本語とは異なる語順や言い回しを参照することに、近代小説の新しい表現の可能性を模索していた一人であった。『萬葉集』を学ぶ晩年の堀は、それとは少し異なる方向、すなわち日本の最も古い時代の書き言葉とそれを音に出すことをめぐる問題に大いに注目していたようだ。

ノオト「水のうへ」には、巻一・七二、巻三・二五一、巻十五・三六四七番歌が引かれ、「妹を偲ぶ歌」も実は純粹に自分を慰める為のものではなかった。……ほんとうは大抵多人数の驚異をめぐに、据ゑた叙事脈の抒情詩であつたのである。旅行中に「家なる妹」を恋しがつた歌の多くは、同行の旅人の共通の感情を唆る処に立ち場があつたのだ。其等の歌は、「旅のう

たげ」の席で謡はれ、よく人々の涙を絞つて、悲劇の中に生の充実と人情の普遍を感じて、寂しい歎びを味ふのと似た慰みを感じさせれば、（其歌は都の人々の口に愛誦せられる様になる。現に万葉集の羈旅歌や相聞の部に収めたもののある部分はあると言つた道筋を通つて、世の記憶や記録の上に、簡単ながら、ある生活の筋を留めたのである。）と書き留められている。『萬葉集』の読書場では、聴覚との関係性において、文学の可能性が新たに模索されていたのではないか。

文学は時間と空間を超越し得るのか。最晩年の堀の読書場は、芥川龍之介から引き継いだこの間に、時間と空間を超え今もそこにある『萬葉集』によつて改めて向かい合う小説家の姿を垣間見せる。ここでは、戦意を支えるものとしての唱歌の同時代的なあり方とは著しく異なる方向において、目で読む言葉としての散文と、音に聴く言葉としての歌との新たな関係性の構築、とりわけその共起の可能性を通して、方法と機能の両面にわたる近代小説の転換が試みられていたのではなかったか。

五 おわりに

稿を脱するにあたり、付表について一言しておきたい。約一〇年にわたり断続的に、『萬葉集』に関連する全手沢本の調査を試みてきたことは既述のとおりだが、その過程で、書入れの状況と内容をデータ化し、一覧に供することにも取り組んできた。本稿では、レイアウトの関係で、元データに含む情報の

一部を割愛したものの、書入れ対象歌や書入れに関する情報は省略していない。

さて、こうした煩瑣な情報には、文学研究上、いかなる意味や位置を与えることができるのだろうか。入力にかかる歳月や労力に見合う意味など、到底見出し得ないと考える向きもあるだろう。稿者の半身もまた、その意見に首肯しかねない。しかし、旧蔵書への書入れを中心に、遺稿ノオトや活字化された随筆類も含め、『萬葉集』からの引用ならびに『萬葉集』への言及をすべてデータ化するという、一見非常に非生産的な作業を行ってきた目的は、堀における『萬葉集』の読書場を再構成することのみにとどまらない。堀の場合、『萬葉集』の受容は一九三八年春の『風立ちぬ』¹⁾完成に前後する時期に始まり、その期間は五三年五月の死去より後には及ばない。健康状態を考慮すれば、戦時下を主とする一時期に限定されると見ることも可能だろう。すなわち付表が示すのは、戦時下における一人の作家の『萬葉集』受容の様態と言い換えることもできるのだ。

たとえば、堀以外の近代作家の蔵書から『萬葉集』関連の文献を取り出し、書入れ対象と内容をデータ化する。さらにその作業を別の作家へと広げてみる。その先では、近代作家の『萬葉集』受容の再構成が果たされることになる。対象とする作家の年齢、活動の時期等を絞り込めば、たとえば太平洋戦争前後における、表面化されていなかった『萬葉集』受容の一面を、新たな形で把握することもできるだろう。もちろんその可能性

は、『萬葉集』以外にも敷衍し得る。そのためには、複数の酔狂人と、情報共有を可能とするプラットフォームの構築が必要だが、蔵書の採掘と、採掘情報のデータ化を横断的に果たすことができれば、近代文学研究におけるテキストの可能性は確実に広がるはずだ。そこには、近代文学が新しい形で、いわばテキストとしての作家を取り戻すことのできる可能性もまた、見出せはしないだろうか。

注

(1) 最終章「死のかげの谷」(「新潮」一九三八・三)の発表に続き、初刊本は同年四月に野田書房から上梓されている。

(2) 『萬葉集』に取材する小説の構想は少なくとも三種類存在する。一つは、防人歌、遣新羅使人歌、東歌を主たる材源とするもので、おもに遺稿ノオト(「水のうへ」)(「出帆」)から詳細が確認できる。いま一つは、奈良京都旅行中の堀多恵宛書簡や、随筆「十月」における「日本に仏教が渡来してきて、その新しい宗教に次第に追ひやられながら、遠い田舎のはうへと流浪の旅をつづけ出す、古代の小さな神々の佐びしいうしろ姿を一つの物語りにして描いてみたい。(略)彼等をなつかしみながらも、新しい信仰に目ざめてゆく若い貴族をひとり見つけてきて、それをその小説の主人公にする」等から推察できるもので、天平文化に関する詳細な調査研究と奈良踏査の成果の集積を基層に落とし込んだ大作である。以上の二種に加え、堀多恵宛書簡

(二九四一・一〇・一九)には、「人間のなものへの神的なものへの侵入、そのために若い娘が犠牲になる——さういつたものを萬葉びととその村を背景にして書かう」というように、女性を中心人物に設定した小さな物語の構想も確認できる。第二、第三の構想が完成していれば、そこには、折口信夫の『死者の書』や『古代感愛集』の影響が顕著に観取できたであろう。

(3) 『伊勢物語など』(『文藝』一九四〇・六)、「十月」(『婦人公論』四三・一、二)、「古墳」(同、三)等。石内徹「古代研究」(竹内清己編『堀辰雄事典』勉誠出版、二〇〇一・一一)参照。

(4) 小川靖彦「もう一つの防人像 堀辰雄のノオト」(『出帆』)をめぐって(戦争と萬葉集)——(『文学』二〇一五・五)、拙稿「堀辰雄」(『出帆』)と『萬葉集』——古の歌を歌うこと、あるいは防人歌を歌わない防人たち——(『日本近代文学』二〇一九・一一)を参照。これら以後の研究として、劉娟「堀辰雄における『万葉小説』への憧憬——(花の話・詩経)から『出帆』に至るまで——」(『文学史研究』二〇二〇・三)がある。なお、堀と『萬葉集』に言及したおもな研究に、小谷恒「堀辰雄と折口信夫——私記風に見た堀辰雄の一面——」(『国文学』一九六三・七)、小川和佑「さらさらふたたび 未完の小説——水のうへをめぐる」(『評伝堀辰雄』六興出版、一九七八・六初出。訂正補筆のうえ「堀辰雄——作家の境涯」丘書房、一九八六・四所収)、大森郁之助「堀辰雄に於ける所謂日本回帰の虚実」(『札幌大学教養部・札幌大学女子短期大学部紀要』一九七八・九)、竹内清己「堀辰雄にお

ける日本古典・伝統——資材として——」(『千葉大学教養部研究報告』一九九〇・一二)がある。

(5) これと関わる記述は遺稿ノオト中にも散見する。たとえば巻十二・三一九一、巻十四・三四七五番歌についての「旅ノ歌ト挽歌トノ混同——鎮魂メノ旅ノ歌トセラレテキル、ダガニツトモ木綿間山ガ墓地ト見ラレル。死人ヲ追悼シテノ歌ト見テモヨシ。」「旅の歌とセラレテキル。シカシ木綿間山ノ山陰ニ見エナクナツテシマツタノダカラ、死人ヲ追悼シテノ歌カ。木綿間山ガ墓地ト見ラレル。」(『古代研究(一)』)、「旅の歌とせられてゐる。が、二つとも山陰に見えなくなつたのだ(か)ら、死人を追悼しての歌と見るのが本当ではないだらうか。」(『萬葉集抄 一七』等を参照。

(6) 注4参照。

(7) 堀の『萬葉集』受容における(鳥)に言及した論稿に、土佐朋子「堀辰雄『風立ちぬ』と『万葉集』」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』二〇一八・三)がある。植物については、旧蔵書中、牧野富太郎『植物記』『續植物記』への繁多な書入れが関心の強さを証している。同書は『萬葉集』歌のみを対象とする記述ではないため、稿者が作成した【表】中での登場は少ないが、堀の書入れは、植物の呼び方、生息地、生物学的特徴等々、ほとんどあらゆる記述に及ぶ。同様に、『萬葉集』歌に焦点をあてていないため、【表】での登場はないものの、堀における古代への関心を問うなら、旧蔵書、北尾鎌之助『聖蹟大和』にも注意

する必要がある。その巻末フライリーフには「あやめ池古墳」をはじめ、随筆「大和路」に関わる書込み、大和路散策中の見聞と思しきメモ（未発表）も見出せる。

(8) 「文学界」(一九四〇・八) 初出。『日本文学研究資料叢書 堀辰雄』(有精堂、一九七二・八) 所収。

(9) 「日本評論」(一九三九・二・三三) 初出。初収単行本は四三年八月、青磁社より刊行された。

(10) 注2参照。

(11) 郡司勝義「改題」(筑摩書房版『堀辰雄全集第七卷(下)』一九八〇・六)に、「昭和二十五年夏、一時小康を得た折に、現存する数倍量のノオトを不要なものとして焼却してしまつた」。「もし生き長らへることができたならば、今後、仕事の上で必要と考へられるノオトのみが遺されたものであるといふ」とある。

(12) 注2参照。

(13) 拙稿「シンポジウム〈堀辰雄、立原道造、そして中村真一郎〉——協同作用と堀辰雄」(中村真一郎の会編『中村真一郎手帖』二〇一六・四)参照。

(14) ちなみにノオト「輕の里」には、卷七・一四一五番歌が引用され、『風立ちぬ』最終章に酷似する死生観「まだどこかにあるやうな、——山にさすらつたり、何かしてゐるやうな——感じで、死者がはからおもひ出される。(略)死者への思ひを深め、その魂をしづめるために、死者を美化して歌ふことを考へ出す。——そこに歌がある」と書き留められている。

【付記】 論文本文に関しては、引用にあたり旧字を新字に改めた。付表の表記に関しては、「凡例」に詳細を示した。本稿に先立ち、付表の一部を、拙稿「堀辰雄「出帆」と『萬葉集』」に掲載している。なお、旧蔵書の調査に際しては、館長の土屋公志氏をはじめ堀辰雄文学記念館に、『萬葉集』歌の整理に際しては天理大学文学部川島二郎氏に、また、本稿の執筆にあたっては青山学院大学文学部小松靖彦氏に、懇切なるご協力とご教示を重ねて賜った。この場をかりて深謝申し上げたい。

(わたなべ・まみ／日本女子大学准教授)

隨口譯5	25	16	3855赤	由縁繪歌
隨口譯5	26	16	3856赤	由縁繪歌
隨口譯5	27	16	3857赤	由縁繪歌
隨口譯5	28	16	3858赤	由縁繪歌
隨口譯5	29	16	3859赤	由縁繪歌
隨口譯5	30	16	3860赤	由縁繪歌
隨口譯5	31	16	3861赤	由縁繪歌
隨口譯5	32	16	3862赤	由縁繪歌
隨口譯5	33	16	3863赤	由縁繪歌
隨口譯5	34	16	3864赤	由縁繪歌
隨口譯5	35	16	3865赤	由縁繪歌
隨口譯5	36	16	3866赤	由縁繪歌
隨口譯5	37	16	3867赤	由縁繪歌
隨口譯5	38	16	3868赤	由縁繪歌
隨口譯5	39	16	3869赤	由縁繪歌
隨口譯5	40	16	3870赤	由縁繪歌
隨口譯5	41	16	3871赤	由縁繪歌
隨口譯5	42	16	3872赤	由縁繪歌
隨口譯5	43	16	3873赤	由縁繪歌
隨口譯5	44	16	3874赤	由縁繪歌
隨口譯5	45	16	3875赤	由縁繪歌
隨口譯5	46	16	3876赤	由縁繪歌
隨口譯5	47	16	3877赤	由縁繪歌
隨口譯5	48	16	3878赤	由縁繪歌
隨口譯5	49	16	3879赤	由縁繪歌
隨口譯5	50	16	3880赤	由縁繪歌
隨口譯5	51	16	3881赤	由縁繪歌
隨口譯5	52	16	3882赤	由縁繪歌
隨口譯5	53	16	3883赤	由縁繪歌
隨口譯5	54	16	3884赤	由縁繪歌
隨口譯5	55	16	3885赤	由縁繪歌
隨口譯5	56	16	3886赤	由縁繪歌
隨口譯5	57	16	3887赤	由縁繪歌
隨口譯5	58	16	3888赤	由縁繪歌
隨口譯5	59	16	3889赤	由縁繪歌
隨口譯5	60	16	3890赤	由縁繪歌

團圓田の池は、赤垣を運は、然云ふ君が頼まき如し。

赤良山の記の手の周面に、かくかくにも、他人の歌ともし(※ウヱ)。

入乃の明も靡らぬか、蓬断にたまはる赤の玉に似たる見む。

生き死の二つの海を眺はした、漣干の川を眺つるなかみ。

心をし無何有の池に覗きたらば、露散すの山を見まはけむ。

心なごり毎て、死に下り、血や死に下るは、塵は俯下て、山は相たす

石壁に、我に物申す夏顔にとよむもの、と、鯛とり食せ

石壁に、我に物申す夏顔にとよむもの、と、鯛とり食せ

後御門の存はる小舟を食ひ、血、雨に散らしては、ほこにさり(※3865)

此河の形、堤のむぢから、記し集、項にまをさす、は、血に無報。

大君の遺は、まなくに、さかいらに行き、し、塵、塵、は、血に無報。

赤ノソで、團圓の上、に、團圓家(一)と書込み、下部赤白に「池ははつまたの池(伴曲ノ)赤(伴草子)3882、赤良山ノ

ホトノアツクツルベシト書込み

團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

3853、3859の團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

赤ノソで、團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

3853、3859の團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

赤ノソで、團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

3853、3859の團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

3853、3859の團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

赤ノソで、團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

3853、3859の團圓の上、に、赤ノソで、團圓家(一)と書込み、

作者不詳

